

初小時間の費と暮ら時とヤクク九里とを結すとの心
古来九里と唱ふと云へり多し是れ他の高野
山といふ積雪の残るく見ゆ山岳と推し
晩生深々云々今回の宿志ハ一層人智の開明に注ぐと
遂り事疑るす一悲しく云へり今日ハ斗らざる興と語れ

明日ハ斗りしと云ふ再ハ帰らんも興なきは云へり
西南の一山と云ふも多し人の通らぬ界と絶回せ
一興と云ふは平岡川に出んは何程の事と云ふ也
如何と

「此後最良」といふことなりと云ふは山は

行路峻易と云ふは岩船部雷村イカヒテ四里半と云

らるゝと曰り甚南と云ふ山熊保と云ふは親方也

また持併坛丹後寺直名のノ獲此ノも女系人の事近

き日の中か帰る事と云ふ然と云ふ雷まの

葉月を教と云ふ

銀帽妻と云ふは金と配職と云ふは蚊帳の事と云ふ

事如く大と云ふは鳥と雲と云ふは鳥と云ふは上藤一首

和歌を詠む〜い〜今日立巖の興を後く翁を却けら
こゝと和〜

古今く押へ川のなる大なるを

明と〜記洛く〜く〜く〜く〜

と花多ハの風を詠〜なる〜や〜一〜一〜

昭日ハハ葉田ヤ先ス〜西大タ〜角回カク年ネン〜云クモあ〜

ありキ年ネンララララクク〜唱ウタよヨ〜東ヒガシ隣ナリ〜とト十ジュウ年ネン〜とトふフ兩村リウムラのノ四シ

塘ドウ暗アン〜思オモふフ〜似ニ〜此界ココノカイ限リミ〜一ヒト等トウのノ平西ヘイセイ〜とトやヤ〜とトなる

角間の村外も小川の傍の橋と云い心毛羽を成とせる

笠の雉と照りぬ照るも日小晒し飼ふも飼ふも

地とらしやう山サトのまねと思ふ此角間の村外

直よ山よか系小出う傍の雄まの知通鼻実サトも思ひ後

後廻と梅葉もさす救丁汗あむり潮ふと滝頂

あり息と流く願ひの東の月山八久初の本とと遠空

向ふ三方の山と包と山と其の景も何れも是より下り事救

丁わしき二股も女も地ありと一股紙と下り雷も出

南

形を二ノ股誠と云く山熊侯不出此を最險難こと云ふ
と云曰角間平の川小源をせよ時々東西二股と形をせの
西形も洞水と合し一流と形を東形も三面山の出谷
より流し出ると云結と此を三と三面ととPの傍
多より山形も界と云思ふ下格此三面もPの山形置
賜村山の三郡小面と云く名標不出と極く多邊境
往昔小池大納言と云く雲上の家小池侯と云く以降星雲凡
六百余年數十代此深山小連綿と云く小池大炊助と云く今

此處の酋長と傳へし之に越後摘徳と云書ふ此事見へり
是より下りて救ふより清涼なる洞溪に入る處を以て
少く山間の耕地より家二三の椽檣少をきりてナ角田の
二村より今日細くありて澆沮を經て遠くとも家と耕作
せし所と云僻邑の艱難思ひせらるるなり道は険し
りり多と云今ハ層嶺四境と擁り日光も餘り出谷の洞
水と湖り即角田平川の上流に登りて遠く山嶺峰ハ巖高
風致最清肅なりと云此洞流とせ紀爲後多り兩

岸より巨材と連接し、是を柱と建垂し、一堤を内り
彼を岸より云形をと家とせり、溜り時を待り、一時是と
流せしむりの様り、水もとどろくの大は、我とせり、
引る所の流、向最を、行形し、とせり、水と

此溪洞と所り、せり、二ツの瀑布を、書流と云、始水と
一ノ流と、二と、二と、一は、是より、二と、丁と、陽と、真水と
二ノ流と、云、二と、二と、二と、最良、流と、此二ツの流の

光京と、水と、仙洞と、より、を、と、流り、道、殆く、對幅、画

五對の如く此流の急なりと誓ひて事最速流

容るんく山の中一の険難をさす此急なる浪りて

見も^{ハシ又}馴ら奇石をとり其質紙白ふく大なる二抱も及

今水垢ふをびく苔滑る生を成り葛の川ら遠流

きりて病室ふ得も云ら日凡い少く峻廻とくも心と

福丁おく今きりり乾流と水と道形も絶ぬ

辛おく絶頂ふ遠きなり又汗を拭ひく西をとも

急りく急る青海白帆と見り事と得南と佐渡より

細きまがりくまき島眼下小念珠の辨天島号見せし

きり此峯を南より北と直りる嶺續ふし今もより生り

を東面の海林原しが西に向ふの嶺を香樹を少壯く

大方を紫系の峯傳ひしと純粋のまふたるを先寺の

曰こより嶺傳ひふ下り所給ふしよさもねし日も傾きぬ

是より眼注つらんこし帰るまぬまを流るる嶺を下り

極しやしと遊るる雷しよふ下り入ぬ戸敷川と大川谷

合し山中を希形の大度より本村をく見の毫を息い

汗と引くせ夫より指し下り一十山と登り集川入る此
峰小大樹の冠松をくまの鞍馬山形西縣の果標と
建らる是より教下と下りく七時より集川より
知方なる千嵐松吉より汗と引くきと宿をとくより待役
きんやうふ今居風も清りくく正松浴りく汗
と引くせり

今日下山の嶺より北より摩耶山と観望せり
定ふ此より下り集川より一の峻峯より一箇と出

昨日^{十七} 築川をなみし 我々の野尻の津ふまをり本俣
 と徑く小園より池田の知多の津七た高くと云ふ息
 小名中より有る延生ふ河と引くせ午後とそこの入
 西より折道く山へ入る支村の峠の山と云ふ九折と
 波し今日と江海の温泉ふ浴しはんと根おさすは
 う許ふ希りぬ折名居合官くも浴客も何ふは昨日も
 多と道中より翌十九日家と云ふ出つ今相と山雷湯と
 三谷のく希り山と是へ分んと昨ら雨の如く夜

岩と

近江中津道の六署サと云せしより孝子屋の山と稱し
予ハ陣ふ常少生通ふ波戸の嶺師宮元々行と云
高々蛇と二柱と個味く午後と廻くく之出て
新橋より三輛の人力き道ハ池田工藤く車と馳つ
そ方より江ふ馬酔く人と取入帰入此行や出六日と
徑くともハ暫時の雨や何ふはねるも池田く是も工藤く
小島り此程の新羽と信輕務と廻へ林風と待り
き程く何れ地とを好むんそよ身の健なり程也

五原一社一辭一重一陽一

明治十三年庚辰八月四日 暖升九子之序余

七十一歲

清洲氏家正綱誌